慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポール・マントゥ著 徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明共訳 産業革命
Sub Title	P. Mantoux, La révolution industrielle au XVIIIe siècle, essai sur les commencements de la grande industrie moderne en Angleterre, Paris, Editions Génin, 1959
Author	中村, 克己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.2 (1965. 2) ,p.145(63)- 149(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19650201-0063
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650201-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一二三頁。

（注8） 明治二十六年漁網需用高総額、一、四一七千円、内、麻網は、一、三八四千円、綿網、三三千円である（「大日本水産会報」一三〇号）。

（注9） 岡本康太郎「函館財界五十年」（「函館新聞」昭和二十六年一月）。

（注10） 渡辺宏彦「戦前戦後における漁業技術発展に関する研究(1)」（水産庁調査資料課、昭和三十五年）参照。

（注11） 岡本康太郎・前掲記事。

（注12） 明治二十年代に各地で使用されていた網種類は一二〇余種にのぼっている。（農商務省水産局編「日本水産捕採誌」）

（注13） 同前、一四頁。

（注14） 月江基一郎「綿漁網の生産に就て」（水産庁経済課・昭和二十六年）二一頁。

書評

ポール・マントゥ著
徳増栄太郎
井上幸治　共訳
遠藤輝明

『産業革命』

中村勝己

一

ポール・マントゥの「一八世紀における産業革命――イギリスにおける近代大工業の起源についての試論」Paul Mantoux, La Révolution industrielle au XIIIe siècle. Essai sur les commencements de la grande industrie moderne en Angleterre, Paris, Editions Génin, 1959. は一九〇六年にフランス語の初版、一九二五年にはロシア語訳、一九二八年には英訳 The Industrial Revolution in the Eighteenth Century. An outline of the beginning of the modern factory system in England. London, 1928. (tr. by Marjorie Vernon) があらわれた。この英訳はイギリス産業革命史の古典としてわが国でも戦前から読まれていた。この英訳は著者マントゥ自身が校閲し文献も増補して、実質的には原著の第二版ともいうべきものであった。一九五六年暮にマントゥは心臓病で病没した。一九五九年にはこの英語版にイギリス経済史学界の長老T・S・アシュトンの序文と、ブルドA. J. Bourdeの文献目録とをあらたにつけ加えて、フランス語新版（邦訳底本）が出版され、二年後の一九六一年には英語版の増補版も出版された。この英語版は間もなくペーパーバックスとなり、廉価に利用出来るようになった。マントゥの経歴については紙数の制約のため邦訳巻頭の「訳者のまえがき」を参照していただくことにする。彼はドイツ風の精緻な分類と形而上学的解釈にはとらわれない実証的経験主義に立っていたが、資本論第一巻をよく読んでいたことは、本文や註にうかがわれる。

二

巻頭の約二〇頁におよぶ「第一版への序文」は、資本主義成立史の研究にとって重要な方法上のいくつかの論点を含んでいる。

第一に、イギリス産業革命史研究にあたってマントゥは三つの限定をしている。その一つは地理的限定、すなわちイングランド、特に「ほとんどもっぱら中部・北部の諸州」を研究対象としている。次に、年代的限定、すなわち、技術的発明の実用開始・プロレタリアート出現・自由放任・工場立法を指標として、一九世紀の初年を下限としている。第三に、「あらゆる工業の動きを記述」せず、「その発展にもっとも重要で、もっとも典型的と思われる工業」すなわち、旧生産組織の変革の例としての羊毛工業、機械装置の出現の顕

著な概観を与えてくれる綿工業、鉄工業および炭鉱業をとりあげ、「個別研究を、ある特定の問題点について、またとりあげるよりも、全体の展望を与えることにつとめ」ている。（邦訳二九～三〇頁）今日産業革命史の研究が産業部門についても地域的にも、益々個別化し細分化し専門化して行く現状にあっては、こうした自己限定ないし捨象は、それが自己限定であり捨象である事を忘れない限り、最も根本的な方法上の遺産であると筆者は考える。われわれは、歴史家として、歴史の豊富さと複雑さを拒否する事は出来ないし、また許されもしない。しかし、その多様化・個別化・専門化への方向が無論理化・無方法化して行くものであるならば、それは研究の前進とはいえないであろう。

第二に、産業革命は生産者が「自己の労働を提供し、労働以外のなにものも所有せず、筋力と生活時間を売って賃金をうけとる階級と、資本をもち、工場・原料・機械を所有し、利潤と配当金を取得する階級」に分裂した「特殊な富の分配様式」の生成を意味していて、「この社会制度は、大工業という中心的事実をめぐってまとめられた、純経済的原因の統合から由来している」ものとし、今日の社会問題を提起したのは大工業であると理解している（邦訳六～七頁）。この点でマントゥは歴史的な経済構造の変革としての「産業革命 The Industrial Revolution」を「産業〔の連続的〕発展 industrial evolution」や「経済成長 economic growth」一般の中に解消しさる立場には立たない数すくない経済史家の一人である。

第三に、このような「大工業 grande industrie, factory system に直接先行する生産形態のなかに、大工業のいくつかの特質をみわけることは可能である」としている。「大工業」の本質的特質は、「製品の市場の広さ」にではなく、その生産の「内部組織と技術」である。かのフランスの「国立マニュファクチュア manufacture d'Etat」「王立マニュファクチュア manufactures royales」および「特権マニュファクチュア manufactures privilégiées」の如きは、国王の奢侈的需要や公共消費に奉仕する為の工業経営で、公的保護・特権・独占権を与えられていた。一七世紀のイギリスの鉱山業やガラス・石鹸・塩・針金などの製造業部門に見られた工業独占も同様の性格のものである。「自生的発展の所産ではない」、「人為的な創造物」たるこの種の企業は、保護・特権がとりさられるや、動揺し破滅に瀕した。それ故に、これらは「近代的大工業とは本質的にことなるし、こののちの時期に大工業の出現することを説明はできない」（邦訳九～一三頁）としているが、他方ではイギリスについてはW・J・アシュリやアンウィン、フィレンツェについてはドーレンの研究によって、一六世紀初頭どころか、更に溯って一五世紀、一四世紀に資本主義的企業の存在を（とくに毛織物業について）認め、ニューベリのジョン・ウィンチコム、マームズベリのスタンプなどのイングランド北部・西部の「富裕な織元」drapiers, cloth merchants のうちに「近代的意味の工業経営者 fabricants, manufacturers」ないし「人為的運動でない」「産業資本主義の自生的発展」「産業資本主義の早熟的な輪郭」をみいだしている（邦訳一五～一八頁）。「特権マニュファクチュア」についてはわが国の学界の理解と一致しているが、「富裕な織元」については、異った理解を示している。

三

第一篇「先行条件」は、第一章「旧工業とその発展」、第二章「商業の飛躍的発展」、第三章「土地所有の再編成」を含み、産業革命の先立つ諸変化（プリパラトリ・チェンジズ）を論じている。第二篇「大発明と大企業」では、第一章「繊維工業における機械使用の端緒」、第二章「工場」、第三章「鉄と石炭」、第四章「蒸汽機関」において技術的発明が「先行条件」のもとでどのように採用されて行くかを論じている。第三篇「直接的な諸結果」では、第一章「工場制大工業と人口」、第二章「産業資本主義」、第三章「産業革命と労働者階級」、第四章「保護干渉と自由放任」において技術革新による社会経済的変革の問題をとりあげている。最後に「結論、産業革命の一般的性格」において、技術的・経済的・社会的視点から産業革命の意味を論じている。

さて、以上の諸論点につきひとつひとつ論ずる事は到底紙幅がこれを許さない。それ故、以下においては、マントゥが産業革命をどのような基本線において分析し記述しているかという点にしぼって考えてみる事にする。産業資本家ないし工場主と賃金労働者がどのようにして創出されたがという問題に関して、マントゥのこたえるところは何か。一言にしていえば「さまざまの出自をもつひとびとである」（邦訳五一七頁）という事になるであろう。史実そのものはそうした答えを与えるであろう。併しもう少し立入ってみると次のような点が指摘されている。

第一に、「商人製造業者 merchant manufacturers は、原料や一部の生産用具を独占し、独立小生産者をしだいに賃金労働者の地位にひきおとしてゆくことによって、工場制度の途中まで前進したのではないだろうか。――このようにして展開された論理は、説得力をもっているという点で魅惑的である。しかし、この論理を無条件にうけいれることは軽率である。

毛織物工業を考察してみよう。商業資本の優位性をもっとも明白にしめしていた地方は東部や南西部の諸地方であり、ノーフォク、デヴォン、ウィルト、サマシットの諸州である。したがって、上述の論理にしたがえば、ここでこそ最初の紡毛工場が建設され、最初の毛織物工場が建設されねばならないはずであろうし、また、生産が多数の小経営に依然として分散していた北部では、その進展がきわめておそかったということになるはずであろう。ところが、これとまさしく逆のことがおこっているのである。すなわち、工場制大工業が最初に出現したのは、まだ活発な家内工業と並存して、ヨークシャにおいてである。云々」（邦訳五一九頁）。「かれらの大部分は、農村からきたものであり、それまでイギリスの人口のかなりの部分、おそらくは過半数を構成していた半農半工の階級から出ている、という事実である。そして、さらにさかのぼってみるならば、ほとんどいつでも、農民の家系に、つまり、いまは姿を消したが、けっして絶滅していないヨウマンの旧い家系にたどりつくのである。云々」（邦訳五二〇～五二二頁）。

冶金工業の場合は如何。「かれらのなかには地方的で小規模な作業場からの出身者が多かった」とし、釘製造人、鍛冶屋、やすり工、熊手製造工、鋤・シャベル職人、時計工、真鋳工、小間物工、金物工、錠前工、借地農、自由農などをあげている（邦訳五二二～五二四頁）。

一方労働力はどこから来たか。第三編第一章でイングランドの人口密度の地域的移動を一七〇〇年、一七五〇年、一八〇一年および一九〇一年の四つの年度をとって分析し、ロンドンとその周辺を除くと、ブリストル海峡からサフォーク海岸に至る線上の地域からランカシャと西部へと移動して行く事を証明し、工場制（とくに綿業および鉄工業におけるそれ）の展開がその原因であると指摘している（邦訳四九〇～五一二頁）。この移動人口はどういう社会階級であったか。ヨークシャでは manufacturer という語は、労働者にも工場主にも差別なく用いられていたが、どちらかといえば後者より前者の意味に近いことが多かった。「工場主と労働者との区別はほとんどつかなかった。」「さらにまた、リーズ、ブラッドファド、パリファックスなどの周辺に住んでいた多数の織物業者たちは土地所有者であり、あるていど耕作者であった……農民階級とつながりをもっていた。云々」「小商人、荷車引き、宿屋の亭主など、たとえわずかであろうとも、ともかく資本をもっているものはすべて紡績業者になった。そのうち若干のものは成功し裕福になったが、しかし、大部分のものは失敗して元の職業にかえるか、しだいに数をましてくる工場プロレタリアートの大群のなかに合流した。」（邦訳五一四～五一八頁）「大土地所有の拡延によって村から追い出された農民、退役軍人、教区の被救恤貧民、あらゆる階級、あらゆる職業から出てくるくずのような人間など」（邦訳五二九頁）。

ここでマントゥが考えている線は明らかに中小生産者、小市民層の両極分解である。しかしマントゥ自身、上掲の引用文にもあらわれているように、史実の複雑性を充分認めていた。のみならず、右のような理解に逆らうような叙述をしている。たとえば「これらの製造業者の大部分は、製造業者となった毛織物商人・drapiers, marchands de venus fabricants, cloth merchants であった」（邦訳三五九頁）。また鉱山・冶金・金属部門では、「貴族」や「商業と商業資本」（邦訳三七四～三七七頁）をあげているが如くである。それ故に、マントゥは必ずしもヨーマン説を支持しないという説も生じて来うるわけである。問題は基幹産業の中で、部門別に、又機能資本家と無機能資本家＝出資の仕方が、しかも動的に又構造転換との関連において、考えられなければならない。（商人はただちに前期的資本とは限らないし、いわんや商業資本が産業資本に転化したからといって、それがただちに「プロシヤ型の途」になるわけではない。）その為にも、又訓話学に陥らない為にも、マントゥ以後の新しい実証的研究が利用されなければならない。マントゥ（マントゥにかぎったことではないが）が「商人」あるいは「商業資本」とかいう場合、それがどのような生産的基盤にのって居り、どういう層から出て来ているか、商業以前に営んでいた（生産的）機能などを検討しなければならない。それらの手続きを全部終えた結果どういう結論が出るであろうか。筆者は、単に史実を列挙する事をしない限り、マントゥの基本線は意外に高い妥当性をもっているように思う。

四

マントゥの所論は、その全体の構造という点からみるとき、多く学ぶべきものをもっているし、又歴史における個人の役割についての実証的な研究としても、なかなか鮮やかな手法を示している。併し、初版以後半世紀以上を経た今日、部分的には第一編の第一章にせよ、第三章にせよ、又第二編第三章にせよ、今日の研究水準からみると不満を禁じ得ないのも止むを得ない事である。「真理の探究者の信頼をえようとするものは、みずから生涯、真理の探究にあたらなければならない」（マントゥ「第二版序」）。細部の批判は現代の研究者の課題である。それとならんで、否それ以上に、技術的・実証的批判が精神的脱落現象とならない事がむしろ現代の我々の課題であるだろう。

終りに、この大部の古典的名著の邦訳に当られた訳者の労に深く感謝するものである。しかし、若干の例をあげると、たとえば「大企業家カーライルが命名したように」（六頁）、「非特権都市 incorporate town」（一七頁）、「リーディング Reading」（一八頁註(四)）、「製鉄所 forge」（一三頁および二七頁註（一八））、「玩具類 Birmingham toys」の如き訳が見られるのはどうした事であろうか。（A5判、本文六九三頁、序、解説、文献目録、索引、定価三、〇〇〇円）

オスカー・ランゲ著
竹浪祥一郎訳
『政治経済学1・一般的諸問題』
――「広義の経済学」の視点――

飯田裕康

本書は、ワルシャワ大学教授であり、ポーランド人民共和国国家会議の議長代理であるオスカー・ランゲ氏の全三巻よりなる体系的モノグラフィー集の第一巻である。従来もランゲ教授は、近代理論の理論的成果を重視し、一般均衡論的立場から、社会主義経済学の構成をめざしていた。いわゆる「競争的社会主義」論といわれる教授の主張に、資本主義経済体制の分析用具が重要な役割をしめしていることは否定できない。しかしながら、ランゲ教授はつねに唯物史観的問題設定を理論研究の基礎とされ、理論科学としての経済学との論理的統一という点でわれわれにいかなる解答が出されるかを心待ちにしていた。本書はまさにこの解答の役割をはたしているといえる。本書の構成は大要次のとおりである。

第一章　政治経済学の対象。基礎的概念。
第二章　生産様式と社会構成体。唯物史観。
第三章　経済法則。
第四章　政治経済学の方法。